ら入っても実力がないと残れない。

瀬野　誰も引き上げてくれないですから。それは分かっていたので同じようにやっていてはだめだと。

市長　「1本撮ってみろ」と言われた時にこの世界でやっていけるかもと思われたんですか。

瀬野　そうです。あとは先輩にすごく有名なカメラマンがいて、コカ・コーラとネスカフェのCMをずっと撮っていて、渋いトーン（世界観）を作り上げた人なんです。その人が上にいると会社の中で目立たないじゃないですか。乗り越えるのは経験が全然違うので無理だなと。そこで考えたのが、その人のやっていないこと、やっていないやり方をしようと。その人は渋いトーンで撮っていたので、私はペールトーンという明るいきれいな色のチョイスばかりして撮っていたら、毛色の違うやつがいるなというのが知られてきたんです。

市長　戦略を練られたというわけですね。今は独立されていますが、会社はいつ辞められたんですか。

瀬野　34か35歳のころです。

市長　独立してからとプロダクションにいたころの仕事に違いはあるんですか？

瀬野　全然違います。会社にいたころは、会社から割り当てられる仕事がいっぱいありますが、独立すると直接指名しかなくなるので、最初のうちは大変です。

市長　独立してどのくらいで安定したと思われましたか。

瀬野　4、5年で。ちょうどバブルが来たころです。

市長　40歳くらいですね。

瀬野　そうですね。80年代後半です。認められて忙しくなったころとバブルが重なってさらに忙しくなりました。仕事の発注でいうと、技術がすごくて認められることもあるし、人との関係によって話が来ることもあります。いかに知り合いがあるとか他のことでつながっているとか。ぼくの場合、人との出会いがたくさんあったと思います。

市長　今まで対談をしてきた人と共通していますね。20代に寝ずに働いたと言う人が多いですね。30代で芽生えてきて他の分野の人たちと知り合いになって、どんどんジャンルが広くなり、その人たちが引き上げてくれる。

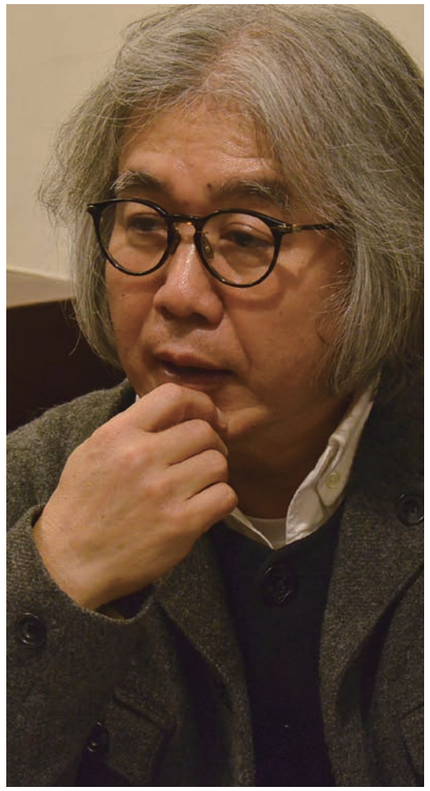
瀬野　いつ病気で倒れてもおかしくないというほど働きました。よく体がもったなと（笑）。

市長　それは人にやらされているのではなくて、やりたいという気持ちでやってるからでしょうね。

瀬野　そうですね。大変だったけど逆に面白かったです。

市長　瀬野さんは外国でも撮影されたと伺っていますが、海外で有名になるということはすごいことなんですね。

瀬野　言葉の壁もすごく大きいですし、外国にはいくらでもすごい人がいます。それに社会的にすごく認められているというか。イギリスにロケに行った時に、向こうでは「ディレクター・オブ・フォトグラフィー」というんですけど、そう言うとすごい尊敬の言葉がくる。映画の撮影の監督というだけで周りの人の態度がぱっと変わる。映画を作ることが社会的にもすごく認められている職業だったりするんです。



市長　私も前の職業は医者で、日本では大切にしてもらえませんが、外国では尊敬してくれますよ（笑）。世の中で頑張っている人に共通することは、最低でも中学校の頃には根っこが見えますね。こういうきっかけでとか。20代は死ぬほど働いて30代では他の分野の人とつながる。人と人のつながりのなかで働いて、50代になったら社会的立場を確立している人が多いです。

また新たなチャレンジに向けて

市長　これから新しいことをやろうということはありますか。

瀬野　映像でなくて、スチール写真で、仕事でない分野で何かできればなあと思っています。

市長　どんなジャンルの写真ですか？風景ですか？

瀬野　風景ではなくて人です。去年、2か月くらい世界中を回って作品を撮りに行ってきました。トロント、ニューヨーク、ブエノスアイレス、ロンドン、ストックホルム、アムステルダム、パリ…。

▲ロンドンで撮影したスナップ写真（左上も）

市長　なぜ、また写真を撮ろうと思われたんでしょうか。

瀬野　映像に携わったものとして、結論を出さないきゃいけないと。大学の頃にやっていた、自分が何かを捉えることに戻ったというか。お金にはならないですけど。

市長　お金にならないことをできる立場にもなったということですね。

瀬野　まぁ、単にやりたいからやると（笑）。結構決意を固めて行ったんです。自分1人で計画を立ててアポイントメントやホテルを取って、機材を持ちながら旅をする。脳を活性化しないとできない。ブエノスアイレスからウルグアイの首都のモンテビデオに行く予定だったんですが、現地の人にカメラを出したら何されるかわからないって注意されたんです。

市長　そういうところを撮りたかったんですか。

瀬野　いや、再開発したところは面白くないんです。そうじゃない昔のブエノスアイレス「南米のパリ」って言われてた所の方がダメになってすごく面白いんです。そういう所の方がいい。でも身の危険を感じて途中で帰ってきましたけどね。ストックホルムみたいにちゃんとした所に行くと、豊かな生活で自分のペースで動いていて、きれいで、子どもがいっぱいいて幸せそうで。別に撮らなくていいかなと思ったり。別の意味でブラジルは子どもがいっぱいいて、小学生が普通に給仕の仕事をしています。

市長　発展途上国は子どもがすごく多いですよね。なんで日本は少子化で子どもが少ないかというと子どもを育てるお金がないからだって言う人がいますが、それは違っていると思います。

瀬野　そうです。本当に貧乏になったら、たくさん産んだ方が働き手が増えて家は助かるんです。ただすごい活気がありますよ。まち中100円ショップ並みに物が安いですし。でも、ボロボロですけどね。

市長　そういうところの方が、住んでる人は貧しいとは思わないし楽しいんでしょうね。

瀬野　すごく楽しそうですよ。私が子どものころは町内に子どもがいっぱいいましたけど、今帰ると子どもがあまりいないからびっくりします。

市長　昔の子どもの方が楽しかったですよね。今は塾へ行かされるし「勉強しろ！」って言われるし。昔は何も言われなかった。

瀬野　楽しかったですよ。塾とか一切行ってないですからね。

市長　私も行ってない（笑）。少子化問題は舞鶴市でも課題の1つで、子どもは〝地域のタカラ〟と思って子育て施策に力を入れています。

瀬野　子どもの頃は遊んでたほうが、右脳が絶対発達すると思うんですよ。遊びは仕事を覚えるための訓練なんです。

市長　答えのでない問題を解かせるのが大事だと思います。計算なんかは大きくなったら嫌でもすることになります。

瀬野　大人になってから右脳を鍛えるのは難しいんです。会社に入って思ったのは、東大を出た子が入ってきても頭はいいけど、現場の仕事が一切だめ。取り継ぎはできないし新しい条件が加わった時に対応できないということもありました。

ふるさと　舞鶴について

市長　外から見て舞鶴のことはどう感じられますか？

瀬野　気が付くのは風景として相当きれいな所だなと。

市長　私もよそ者なので赤れんがなどすごいと思うところが多くあります。ずっと地元にいる人は気付いていなくて残念に思うこともあります。残して欲しいものはありますか？

瀬野　外に出た方がよく分かると思います。一番思ったのは五老岳からの風景がすごくよかったので、これはキープしたいなと。吉原の風景もよかった。

市長　東は海軍から発展したまち、一方で西は城下町文化に育まれたまち、加佐には農村の風景、大浦には漁村の風景があり良いまちです。

今日はとても興味深いお話を聞くことができました。ぜひ、五老岳からの風景を瀬野さんに撮っていただけたらと思います。ありがとうございました。